

樹 蔭

策を看破られ無惨にも社會に必要の人物を暗殺せんと企てたか吾親友濱田君を害せんと巧んだか此奴「第二撃を得し時の後様も倒れて苦氣も喘き出せり 鈴木利慾の爲よ善人を惱まし色情の爲よ好くも處女を苦しめたヤ」第三撃の最早叫喚の聲を發せず唯頻りよのたくり廻れり鈴木亦も杖を翳して重原を睨付し濱田の之を押止め濱田も充分だ僕の負傷者を川向よ連行き妹よ渡して手當をさせる君の巡查の此處よ來る迄 鈴木宜しい此奴の僕が受持た「濱田の伊之吉を彦造が車よ乗せて立去らんとあしけるが四五間行て立留り 濱田鈴木君傷を付ると面倒だから跡で撃つことよ止めたまへ鈴木の不承く 顔よて重原を尻目よ掛けつゝ 鈴木宜しい「濱田の伊之吉を

樹 蔭

伴ふて仲吉の家よ行き一伍一什の様子を告げて伊之吉の介抱を托し且人をして警察よ訴へしめしよぞ警部巡查の彼所よ駈付け鈴木の訴え因り謀殺未遂犯として重原を受取り車夫彦造傳八も從犯として直よ召捕り程なく一全刑罰を受け彼の歌も他の事件よ坐して此頃受刑中ありと云ふさて濱田の其翌日阪野及清水屋の名義を以てお光仲吉の身を購なれせ十餘日の後改めてかの工業會社の開業祝宴を設け第一日よ故舊親戚を招きお光お仲を迎へて鈴木と共に結婚の式を擧げ第二日よの貴顯紳士を招待し第三日よの在野の有司家を招集していつれも盛大ある筈をなし不忍池畔の約束も今まの盡く全きを得たり又阪野久則の當年春の頃より病氣次第よくつろぎし上近來喜ば



一 樹 蔭

しき事の集ひければ病氣もいつか忘れしが如く忽ち身體  
舊より復したれば濱田の乞ふ應じて工業會社横濱支店の長  
とあり鈴木節三の大阪支店長として傍ら西南地方政黨の  
結合を計り濱田を助けて日よ月よ工業の盛昌を致し伊之  
吉の負傷も程なく癒えしより職工長として採用せしに元  
來目先の利く男よて且つ濱田の爲よの生命を擲つ迄は働  
きければ職工中の氣受も好く今の堅氣とありて社中重要  
なる部分を勤め父母を安樂よ養ひけるとぞ

一 樹 蔭 終

明治廿四年三月九日印刷  
全 年三月十一日出版

版 權 所 有

編輯者兼  
發行者

日本橋區新和泉町一番地

筒井民治郎

印刷者

日本橋區新和泉町一番地

瀧川三代太郎

發兌

日本橋區新和泉町一番地

今古堂







